



インドにおける安全対策について(第2部)

本編は、最近のインドにおける人的リスクとその対策等についてまとめたものであり、第1部に続き、本号(第2部)では、感染症・自然災害の概要及びインドでの企業における安全対策についてまとめている。なお、本編は、弊社が契約企業に対し不定期で情報提供している「海外安全レポート」から抜粋したものである。(「海外安全レポート」は弊社の「海外危機管理情報提供サービス」に基づき、不定期に提供しているもので、2004年の実績で50編のレポートを提供した)

1. 感染症等の状況

① 感染症等の概要

インドには様々な感染症や風土病がある。特に、コレラ、赤痢、腸チフス、A型・E型肝炎等の感染症や寄生虫疾患がよくみられる。また、熱帯・亜熱帯地域特有の感染症であるマラリア・デング熱も存在している。下記は、インドで見られる主な病気である。

【図表1：インドで見られる主な病気】

食べ物・水から感染する病気	虫が媒介する病気	その他の疾患
腸チフス・パラチフス	マラリア	B型肝炎
A型・E型肝炎	デング熱	流行性髄膜炎
コレラ・赤痢	日本脳炎	狂犬病
食中毒	ペスト	エイズ
寄生虫疾患	リーシュマニア症	破傷風
ポリオ	フィラリア症	

消化器系疾患は4～10月の暑い時期に多く発生する傾向がある。熱帯・亜熱帯地域特有のマラリアやデング熱は、ほぼ一年中発生しているが、特に高温多湿の時期に多いとされている。また、流行性髄膜炎の発生も報告されている。破傷風・肝炎・性病は、季節にかかわらず発生しており、その他様々な寄生虫疾患も報告されている。WHOによれば、2002年2月4日～2月19日に、インドのヒマチャルプラデッシュ(Himachal Pradesh)州シムラ(Shimla)地方で、16人(うち4名が死亡)の肺ペスト患者が報告されている。また、2002年に7人の死亡患者を含む2,338人のコレラ患者発生がWHOに報告されている。

②病気の予防方法

インドには様々な感染症や風土病があるが、都市やリゾート地での短期間の観光であれば、食べ物や飲み物に注意し、体調を整えておくことが肝要である。また、マラリア等の危険もあることから、蚊に刺されないようにすることも重要である。その他、下記のような点について留意することが望まれる。

(A) 注意すべき食べ物

- ラッシー（屋台で出される代表的なヨーグルト飲料）：食中毒菌等に汚染されていることがよくある。
- ヨーグルト：ヨーグルト・アイスクリーム等の乳製品は、保存状態が悪い場合や十分殺菌されていない牛乳から製造されている場合、細菌が繁殖しやすく食中毒菌等に感染することがある。
- 生野菜・果実：生野菜（サラダ）やカットフルーツは、包丁や食器等を洗っている水が汚染されていることがあり、A 型肝炎、食中毒等や寄生虫疾患に感染する危険性がある。果物を自分で剥いて食べる場合は安全である。
- 生鮮魚介類：刺身等加熱していない魚介類は、食中毒等や寄生虫等に感染する危険性がある。
- 生水・氷：都市では水道の設備はあるが、水は硬質で軟質の水に慣れた日本人は下痢を起こすことがある。生水や井戸水は細菌や肝炎ウイルスに汚染されていることがあることから、飲用には栓のしてあるミネラルウォーターや煮沸した水を利用する。ジュース中の氷も気を付ける。氷に用いた水が汚染されていることがある。

(B) その他注意すべきこと

- 河川や湖：淡水の河川や湖での水泳や水遊びは避ける。寄生虫や細菌に感染する危険性がきわめて高く、感染した場合長期化することがある。
- プール：プールによっては消毒が充分行われていないこともある。そのため、プールの水は飲まないように留意する。
- 野犬や猫：狂犬病ウイルスを持った犬がいるので、よだれを流している犬には近寄らない。また、野犬等の動物にかまれた場合、すぐに信頼できる病院で狂犬病発病予防のワクチンを接種する。

2. 自然災害

インドは地理的・気候的な特徴から、サイクロン・干ばつ・洪水・地震・火災・地滑り・雪崩等の自然災害が数多く発生しており、世界でも災害の発生しやすい国の 1 つであると言える。

①洪水

年間の降雨量のうち 75% が 6～9 月のモンスーン期に集中する。洪水が発生するのもこの時期である。洪水がよく発生する地域は、インド・ガンジス平野のブラマプトラ（Brahmaputra）川、ガンジス（Gangetic）川である。その他の地域としては、北東部のナーマダ（Narmada）川、タプティ（Tapti）川、マハナディ（Mahanadi）川、クリシュナ（Krishna）川、カベリー（Cavery）川等が流れる中央インドとデカン高原で洪水が発生している。

②干ばつ

モンスーンは規則的に移動しないため、全土の 68% を占める低降雨量（750mm 以下）と中降雨量（750～1125mm）の地域が、定期的に干ばつ状態となる。100 年間の降雨状況の分析によると、乾燥、半乾燥、温帯地域において、普通の降雨量を下回る確率は 54～57% で、乾燥、半乾燥地域においては、8～9 年に 1 回の割合で、大きな干ばつが発生している。

③サイクロン

1 年に平均 5～6 個の熱帯サイクロンがベンガル湾、アラビア海で発生しており、この内 2～3

個は大規模なものとなる。モンスーン前の期間（5～6月）、モンスーン後の期間（10～11月）という2つのサイクロン期がある。1891～1991年の100年間で発生したサイクロンのうち、アラビア海で117個のサイクロンが発生し、ベンガル湾では442個のサイクロンが発生している。サイクロンによる被害としては、暴風・強風・豪雨・高波（高潮）等があるが、多くの負傷者は、高潮や高波による沿岸の浸水によるものである。なお、最大波が満潮時に発生した場合には、被害が大幅に拡大する。

④地震

ヒマラヤ山脈は、新しい地層の山脈であるため、ヒマラヤの地殻は地質学的に活発である。東部に Arakan Yoma 地層、西部に Chaman 断層をもつヒマラヤ山脈の前面部分は、世界でも最も地震活動が活発な地域の一つである。過去55年の間にマグニチュード（M）8を超える地震が4回（1950年と1987年の Assam 地震・1905年の Kangra 地震・1935年の Bihar-Nepal 地震）発生している。インドの半島部分は、地殻変動の活発な境界から遠く離れているため、安定した地域と考えられている。この地域は、地震活動は活発ではなかったが、1993年9月30日にはマハラシュトラ（Maharashtra）州の Latur でマグニチュード6.4の地震が発生し、多くの犠牲者が発生している。また、2001年1月26日には、西部のグジャラート（Gujarat）州でマグニチュード7.9の地震が発生し、2万人以上が死亡している。

⑤地滑り

ヒマラヤ山脈と北東の丘陵地域及び西部の高地においては、数多くの地滑りが発生している。ヒマラヤ山脈地域では、水源のコシ（Kosi）川等によって運ばれる土砂が原因で、峡谷等で地滑りが発生し易い状況となっている。また、ヒマラヤの地震活動も、地滑りに大きな影響を及ぼしている。更に、モンスーンによる大雨も、西部の峠斜面における地滑りの原因となっている。

⑥雪崩

ヒマラヤ山脈の一部は万年雪を有し、主要な観光スポットとなっているが、同地域では、これまでも雪崩により、数多くの死者等、甚大な被害が発生している。ジャム・カシミール州、ヒマチャルプラデッシュ州等の丘陵地においては、降雪の間や後に発生することが多く、ヌブール（Nubur）渓谷及びシオック（Shyok）峡谷では、これまで2万人以上の住民や登山者が犠牲となっている。

3. 企業としての対策

第1部で記載した通り、インドは、世界で最もテロ発生件数が多い国の一つであるが、これらのテロのほとんどは、特定の州で発生している。そのため、テロが頻発している下記のような州への渡航・滞在は厳禁とすることが不可欠である。

- ジャム・カシミール州
- マニプール州
- アッサム州
- ナガランド州
- トリプラ州
- メガラヤ州
- アンドラプラデッシュ州
- オリッサ州
- チャーティースガル州
- ジャールカンド州
- ビハール州

しかしながら、宗教対立によるテロやイスラム原理主義によるテロの場合、対象は全土に及ぶこととなることや都市部での犯罪に巻き込まれないために、インドに渡航・滞在する出張者・駐在員・帯同家族等には、下記のような点を周知徹底することが肝要である。

①一般の安全対策

- 夜間帯の出入国を極力避ける。
- 空港で声を掛けてくるタクシーには絶対乗らない。
- 単独旅行は極力避け、2人以上で行動する。
- 貴重品は、袋に入れて外から見えないように首から下げる等して、常に身体から離さない。
- 夜間の一人歩きは行わない。
- ホテルはできる限り事前に予約をし、また、極端に安いホテルは避ける。
- リクシャー（後部に 2 人掛けの屋根突きの座席がある大きな二輪車を自転車で引っ張るもの：言葉は日本の人力車から派生）やタクシーの運転手等から良い店を知っている等と誘われても一緒について行かない。
- 親切そうに声を掛けてくる見知らぬ人の家に食事に行ったり、泊まったり、車に乗せてもらったりしない。また、飲食物をすすめられても口にしない。
- クレジットカードで買い物をした際は、サインをする前に必ず通貨の単位や金額を確認する。
- タクシーに乗る際は、プリペイド・タクシーが利用可能な場合には極力これを利用し、行き先を告げ、半券を受け取り、ナンバーを指定されたタクシーに乗車する。

②インドにおける感染症を含む病気については、既述の「1. 感染症等の状況」の項を参照頂きたい。

③既述の通り、インドにおいては自然災害が多いことから、最新の気象情報の把握に努めることが肝要である。また、滞在している地域において、歴史的にどのような自然災害が発生したことがあるかを事前に把握しておくことも望まれる。

④テロの標的となるような場所には近づかないことを徹底する。特に、不特定多数の市民が集まる場所、外国人が数多く集まる場所等には、決して近づかないことを徹底する。

⑤使用する航空便・ホテルについては、米系・英系・イスラエル系はなるべく利用しない。

⑥渡航旅程を立てる上での留意

- 外務省等の渡航情報等による情報収集
- 政治的・宗教的日程等、テロの可能性を増大させる要素のチェック（特に下記のような日程）

【図表 2：インドにおける政治的・宗教的日程（2005 年 8 月～12 月）】

日付	内容
2005 年 8 月 15 日	独立記念日（1947 年）
2005 年 8 月 20 日	マラバール地方で、ムスリム農民マーピッラの武装反乱が起きた日（1921 年）
2005 年 8 月 27 日	クリシュナ生誕日（祝日）
2005 年 9 月 1 日	第二次印パ戦争が勃発した日（1965 年）
2005 年 9 月 7 日	ガネーシャ・チャトゥルティー（祝日）

日付	内容
2005 年 9 月 13 日	マザー・テレサ（9 月 5 日死亡）の国葬が開催された日（1997 年）
2005 年 10 月 2 日	マハトマ・ガンジー誕生日（1869 年）
2005 年 10 月 12 日	ビジャヤ ダサミー（祝日）
2005 年 10 月 27 日	第 1 次印パ戦争が勃発した日（1947 年）
2005 年 10 月 31 日	インディラ・ガンジー首相が暗殺された日（1984 年）
2005 年 11 月 1 日	ディワリ（ヒンズー教の祭り）
2005 年 11 月 3 日	ラマダン（イスラム暦の断食月）の終わり（イード・アル・フィトリ）
2005 年 11 月 11 日	グル・ナーナク誕生日（祝日）
2005 年 12 月 6 日	ヒンズー教徒がアヨディアにある 16 世紀建立のモスクを破壊した日（1992 年）
2005 年 12 月 27 日	カシミール紛争が勃発した日（1947 年）
2005 年 12 月 30 日	北東部のアッサム州コクラジャルで、デリーに向かっていた急行列車が少数民族の反政府ゲリラ「ボド解放のトラ」に爆破され、数百人が死傷した日（1996 年）

⑦海外出張旅程の把握・管理の徹底（特に旅程については所属部署及び人事部等で把握しておくことが不可欠）

⑧緊急時の初期対応の徹底

- 避難する場所（ホテル・日本公館・現地事務所等）
- 緊急連絡に関する留意点 等

海外出張の可否及び駐在員・帯同家族の一時退避等の判断に際しては、日本外務省の渡航情報等を参考に判断することが実効的であるが、日本外務省の渡航情報においては、「退避勧告」を積極的に発出しない傾向があるため、米 국무省・英国外務省・豪州外務貿易省等の情報等を加味し、総合的に判断する必要がある。なお、日本外務省の「退避勧告」は、その他の国の外交機関に比べ、積極的に発出しない傾向がある一方、「退避勧告」の下での「渡航延期勧告」については、比較的柔軟に発出する傾向がある。そのため、企業においては、「退避勧告」に「渡航延期勧告」を加味して判断する必要があると言える。

また、下記のような警告及び措置があった場合には、すぐに海外出張者・駐在員・帯同家族等へ注意喚起する必要がある。特に、(A)については、極めて精度が向上していることに留意する必要がある。

- (A) 米国政府によるテロ警告や全世界又は特定地域に対する警告（Worldwide Caution）等が発出された場合
- (B) Usama Bin-Ladin 氏又は Al-Qaida 等からテロ予告・警告等が発せられた場合
- (C) 米国の国家安全保障アドバイザー・システム（Homeland Security Advisory System）の対策レベルが引き上げられた場合

以 上

参考文献：アジア防災センター・厚生労働省検疫所等の資料

本編は、弊社が契約企業に対し不定期で情報提供している「海外安全レポート」から抜粋したものである。（「海外安全レポート」は弊社の「海外危機管理情報提供サービス」に基づき、不定期に提供しているもので、2004年の実績で50編のレポートを提供した）

第68号（2005年11月発行）